

## ○切手（小型シートも含む）の中に見る切手

1960年代、映画に見る切手が題材にされた女性俳優、オードリー・ヘップバーン主演の「シャレード」といった映画がヘンリー・マンシーニの曲をBGMとして、放映された。結果的には、金は切手になり、のり付き未使用切手も、封筒に貼り切手の価値も半減してしまったのではと思っている。切手は、ブラジルの「牛の目」切手も入っていたことだったと覚えている。

さて、本題に入ろう。切手の中に見る切手は、日本では、1994-96年の郵便切手の歩みシリーズで見ることが出来る。第1集で「竜切手」、第2集で「小判切手」、第3集で「明治銀婚」、第4集では「芦ノ湖航空」、第5集では、「産業図案切手」を見ることができます。ここでは、第1集（イ）を紹介します。

オーストリアでは、どんな類の切手かは知りませんが、切手といった概念が収集家を介して伝わります。それというのも、年に一度、「切手の日」があり、よく、切手を題材にして、12月に発行していたからです。それは、1949年から始まり、ここでは、1950年12月2日発行の「切手を調べる収集家」（ロ）と1955年12月3日発行の「切手アルバムを見る若者」（ハ）を紹介しましょう。この「切手アルバムを見る若者」は、なんだか、和風、洋風を問わずに、若い頃の孤独な内面的な性格の自分の姿を思い出させてくれます。

続いて、アメリカでは、1947年5月19日に「切手100年国際切手展記念」の小型シートで、アメリカ普通切手、1847年シリーズの無目打ちの一番目の切手「フランクリン（5c）」と「ワシントン（10c）」の二つの切手の色を変更して、再現しております。原画の切手は、1985年のアメリカ切手図鑑で、「フランクリン（5c）」が165万円、「ワシントン（10c）」が700万円します。この右に載せる小型シート（二）は、1985年での評価は700円です。その下に載せる切手は、1972年11月17日発行の「切手収集」で、ルーペで見る赤茶色の「フランクリン（5c）」、（ホ）で、これが大元の色で、前述（二）の青色の「フランクリン（5c）」とは、図案の色が異なる事と分かり、そこが偽造を防ぐ為の重要なポイントでもありました。

以前、集めていた中国切手でも、小型シート内に見る切手が、1996年3月20日に発行されました。大元になる切手は、「紅印花加蓋郵票」の8種で、とても高価な品も中にはあります。私も、安い「紅印花加蓋郵票」を数種持っていましたが、もう、6,7年前に、処分しました。以前は、中国は身近な国でしたが、思想も共産圏で、経済発展と共に心配の国にも思える様になった。



イ



ロ

ハ

UNDER AUTHORITY OF  
ROBERT E. HANNEGAN, POSTMASTER GENERAL

PRINTED BY THE  
TREASURY DEPARTMENT  
BUREAU OF ENGRAVING AND PRINTING

100TH ANNIVERSARY  
UNITED STATES POSTAGE STAMPS

IN COMPLIMENT  
TO THE CENTENARY INTERNATIONAL  
PHILATELIC EXHIBITION

NEW YORK, N.Y., MAY 17-25, 1947

ニ



ホ